

## 論 説

## 資本制的私的所有の存立構造と歴史的特質

— マルクスの資本主義所有論 —

西 野 勉

本稿は、1989年度経済理論学会第37回大会で、《経済学と所有—「経哲草稿」から「資本論」—》という表題のもとに口頭発表したもののほぼ全文であるが、内容をより正確に表現するため表題を変え、読み易いように中見出しをつけた。学会発表時点からすでに5年近く経つものをここに活字として公表しておこうとする理由について、まず簡単な説明をしておきたい。

1989年この年の5月に、わたしは、学位論文となった『経済学と所有—「経哲草稿」から「資本論」—』（世界書院）を公刊したのであるが、この学会報告は、この著作の意味と核心を学会で報告しておくことを目的としたものであった。だから、この報告でわたしが示した学問的な到達地平・理論内容それ自体については、すでにこの著作で公表済みであり、学問的到達点としてはこの著作に新たなものを加えているわけではないという意識があったので、著作公刊直後のその時点では活字化することを留保していた。

その後、この著作に関するいくつかの書評を頂いたり、また検討会の機会にも浴したが、正確な理解というものを得ることの難しさ、特に全体の体系をきちんと読んでもらうこと自体の難しさをその都度思い知らされ、そのための不満を心に堆積する過程で、〈著者による著書の解説〉というべきこの報告の活字化の欲求・必要を強く感じるようになっていた。しかし91年以降、役職上「新大学設置基準」に対応した大学改革の仕事に精力を注がざるをえない日々をむかえ、2年間は研究上の仕事の進展に振り向ける心身のゆとりを喪失して

しまっていたので、そのためそれを放置してしまってきたのであった。

活字としての公表が遅れたことの基本的理由はこういうことであるが、その活字化公表のより積極的な理由についていえば、この報告が、当の著作の内容の中核部分を紹介している独自の意味を持つというだけでなく、この報告では、当の著作に結実したわたしの研究営為が、わが国のマルクス理論学界のどのような問題状況を背景に、どういう課題を引っ提げ、どういう認識とどのように対決しようとしたものであったかが、よく整理されており、そのことによって著作に結実したわたしの研究の学問上・学界上での位置づけというものがより鮮明に出来ていると思うからである。

### 〈目次〉

#### 〔はじめに〕

#### 〔I〕わたしの背負った課題と研究の道筋

##### (A) 背負った三つの課題

##### (B) 三つの課題の追求を促した事情およびその前提となった認識・問題意識

###### (1) 第一の課題をめぐる事情

###### (2) 第二・第三の課題をめぐる事情

#### 〔II〕研究の諸結果

##### (A) マルクスにとっての資本制的所有の中心問題

##### (B) 資本制的私的所有の存立構造の経済理論的解明について

###### (1) 要約

###### (2) 重要なポイント

###### a) 「単純流通」次元の抽象・理論的確定の経緯とその意義

###### b) 「取得法則転変」論の重要な意義

##### (C) 資本制的私的所有の歴史理論的解明について

###### (1) 要約

###### (2) 重要なポイント

###### a) 資本制段階を前資本制段階と分かち四つの事態と前資本制段階の特質

###### b) 資本制段階の歴史的特質と資本制的所有

###### c) 「第一の否定」・「否定の否定」の核心

## 〔はじめに〕

報告を始めます。レジメの始めにこの報告の主体的必然性ということについて次のように述べております。

《わたしは、第26大会(1978.10)における報告－〔「個人的所有」「再建」問題について〕－において、『資本論』第一部の事実上の総括的叙述部分における〈資本制的私的所有の否定〉→〈個人的所有の再建〉〈社会的所有への転化〉という展望をめぐる論争にたいして、所有概念の根幹にかかわる問題提起を込めてその部分に関する積極的解釈を打ち出しておいた。しかし、当の問題の解釈は、『資本論』に体现されている資本制社会についてのマルクスの唯物論的把握とその経済学的諸範疇の論理的再構成の方法とについての理解を、集約的に問返すものであったがゆえに、わたしは、わたしの積極的解釈の正しさを全面的に明らかにするためには、マルクスが資本制的私的所有というものを、どのような視座と内容でとらえ、どのような方法で再構成しようとしたのかを徹底的にとらえかえてみるのが、どうしても必要であると考え、その自覚＝課題設定のもとに研究を進めてきた。そして、その研究の成果を、最近、『経済学と所有－「経・哲草稿」から「資本論」－』（世界書院,1989.5）に結実させたのである。

本報告では、その研究営為の道筋を回顧しながら、研究の到達点・成果を、時間の制約を考えてごく要点のみ報告してみたい。》と。

ここで述べていますように、11年前のこの大会において、わたしは、あの「否定の否定」「個人的所有の再建」問題についての報告を行ったのですが、あの『資本論』第一部の「資本制的蓄積の歴史的傾向」総括的理解は、マルクスの唯物論的社会観にもとづく資本制段階の歴史的特質把握とその経済学的再構成の方法についての理解をあらためて問返すものでありました。

わたしは、この問返しを自己の課題とせざるを得なかった訳ですが、その際、その問返しをマルクスの所有論つまりマルクスが資本制的所有というものを、どのような視座と内容でとらえ、どのような方法で再構成したかを中心に据え

ておこなっていった訳です。

資料NO.1 (NO.1-5を本稿末に掲載) に、この問題に関する私の研究過程を年代順で列記しておきましたので参考にしてください。

それでは、本論にはいります。

## 〔I〕わたしが背負った課題と研究の道筋

### (A) 背負った三つの課題

レジメの〈(一)研究の道筋〉のところを見ていただきたいとおもいます。読み上げます。

①『資本論』第一部末尾の「資本制的蓄積の歴史的傾向」総括において「第一の否定」「否定の否定」として総括している所有の歴史的転化とは、生産＝取得様式の歴史的転化のことであること、そして、②「第一の否定」は、〈小経営生産＝取得様式から資本制の生産＝取得様式への転化〉を総括したものであり、だから、③「否定の否定」によって「再建」されると展望されていることからは、〈小経営生産＝取得様式〉を特徴づけている一つの基本的特質・要素の「再建」にはかならないこと、そして、それは、イ) 労働主体の生産手段への結合、ロ) 生産過程の精神的力能＝指揮・管理、ハ) 生産の成果の取得、といった生産＝取得過程のトータルな機能が労働主体に属していることの「再建」、つまり、労働者による非階級的所有の「再建」ということにかならないこと。これが前回報告の主旨であったが、ここから私は、マルクスの a) 生産＝取得様式すなわち所有ととらえるとらえ方、b) 資本制の生産＝取得様式を小経営生産＝取得様式からの転化ととらえるとらえ方、についての全面的裏づけの課題を背負うことになった。

ところで、『資本論』第一部は、蓄積論の始め(フランス語版、第7篇第23・24章)で、周知の〈商品生産の所有法則の資本制(家)的取得法則への転変〉を論じ、蓄積論の終わり(同、第8篇)で、かの所有の歴史的転化についての総括をおこなっているのであるが、c) この両者の関係を統一的視野のもとにとらえ返すこと、これがまた、当面している課題遂行にとって避けて通れない

核心をなす課題となった。わたしは、そうした課題を背負って、それらがマルクスの資本制的私的所有の経済学的解明の研究営為の過程において、どのような視座のもとに成熟・完成させられてきたものであるかを、『資本論』を出発点・帰着点としながら、『要綱』⇔「ブリュッセル」時代（『共産党宣言』『賃労働と資本』⇔『哲学の貧困』）⇔「パリ時代」（『経・哲草稿』・「パリ・ノート」）というように往復的研究を行い、追求していったのである。》

ここで述べていますように、わたしは、わたしの積極的解釈を全面的に裏づけるには、所有論を中心にマルクスをとらえ返すという大きな基本的課題を据えた上で、より具体的には三つの課題、すなわち、

①マルクスは、資本制的生産＝取得様式をこそ資本制的所有ととらえていたこと、より一般的にいえば、マルクスにとっての所有の中心問題は、生産＝取得様式であったということ、このことを全面的にとらえ返し、そのきちんとした裏付けを行うこと、

②資本制的生産＝取得様式すなわち資本制的私的所有を小経営生産＝取得様式すなわち「諸個人の自己労働に基礎をおく分散的な私的所有」（第2版）あるいは「独立した個人的な労働の必然的帰結にほかならないかの私的所有」（仏語版）の「否定」と総括し、資本制的生産＝取得様式を後者からの歴史的転化と総括していること、このことの含意をマルクスの資本制段階に関する歴史理論の把握をとらえ返すことによって全面的に整理しなおしてみること、

③いわゆる「取得法則転変」論とこの歴史的転化論との関連を統一的視野もとらえ返してみることに

という三つの課題を、いわば一体として追求せざるをえないということになったわけでありませう。

## (B) 三つの課題の追求を促した事情およびその前提となった認識・

### 問題意識

以上は主としてわたしにとっての問題追究の主体的な必然性・筋道についてでありましたが、つぎに、わたしにこうした課題を改めて追究することを強く促した客観的な理由・事情ということについて若干の重要なことをはなしてお

きたいと思います。

### (1) 第一の課題をめぐる事情

ひとつは、今いました第一の課題をめぐる次のような事情でした。わたしには、マルクスにとって所有ということの中心問題が、生産＝取得様式のことであったということは、問題追究の初期の時点において確信に達することのできたことでした。

あの「第一の否定」「否定の否定」の叙述箇所は、明らかに生産＝取得様式の転化を所有の転化として総括しているものであるし（資料NO.3）、また、それが、『資本論』第一部の内容全体をふまえた総括、つまり、資本の生産過程の全展開をふまえた総括としてなされていることからいってもそうだし、また、『要綱』を詳しく検討してみた結果からも、そのことについては揺るぎない確信が形成されたわけです。

わたしの『要綱』研究過程は、資料NO.1の論文番号②④⑤を参照して貫えればよいのですが、そこでわたしは、『要綱』での資本制的所有把握には、ふたつの視角が見いだされること、ひとつは、いわゆる「取得法則転変論」に示されている視角、もう一つは、配布資料NO.4の「フォルメン」直前に [ ] でくくって強調されている部分で示されている視角、この2つが見いだされることをつかみだしてあります。簡単にいえば、前者が、「単純流通の取得法則」との関連で階級的な資本制的取得の存立構造を問題にする視角であるのにたいして、後者は、見られるとおり、資本・賃労働関係によって行われる資本制的な生産過程（価値増殖過程）を資本制的取得過程としてとらえることによって、その歴史的・特質を問題とする視角であったということ、そういうことを整理して示してあります。

ところが、

a) この後者の視角、つまり、生産過程を取得過程ととらえかえす視角、だから、生産様式とは取得様式のことなのだという視角こそが、この「第1の否定」「否定の否定」論述を理解する場合の鍵なのだということが、「個人的所有」再建問題の論争においては、ほとんど理解されていない。生産手段＝社会的所有、消費手段＝個人的所有をそこに読みとる解釈をはじめとして、それを批判

した人たちにあっても、このことが本格的に理解されていない。そのことにつきましては、資料NO.1の論文番号⑦の富塚・服部・本間編「資本論体系」第3巻・「第2部・論点」の〈否定の否定〉「個人的所有の再建」において明らかにしておきましたし、それは今度の本にも最後の方にその一部を収録してありますので見ておいてくだされば結構かとおもいます。

このことが、第二・第三の課題をにらみすえながらこの課題をよりいっそう全面的にとらえ返し、裏付けてみせる客観的必要を痛感した事情の一つでした。

b) わたしにこの課題の客観的必要を痛感させていたもう一つの事情は、社会主義的所有とは何か、ということについての「スターリン主義的」解釈の問題性でした。

社会主義とは生産手段の社会的所有であるとして、その社会的所有の成熟・完成を国家的所有におく考え、極端に言えば、生産手段がすべて国家的所有になることが社会主義的所有の完成であるというような考え方・解釈、こうした考え方・解釈の問題性は、協同組合的所有を重視しなかったところにあるという次元の問題だけではなく、そこにみられる所有概念そのものの次元にあるのだということ、つまり、マルクスが問題としていた所有の中心問題は、生産手段は社会が所有し、消費手段は個人が所有するというような2分法的解釈が前提しているような次元の「所有」ではなく、人間の生産的生活のあり方つまり自然から人間に必要なものを加工・生産し、享受するあり方、すなわち生産＝取得活動のありかたのことであることを正しく踏まえるなら、それが社会的集団的形態のもとで、いかに個々人の自主的民主的活動として組織・展開されているかの度合いによって社会主義的所有の実現の成熟度が計られなければならないことになるはずである。

社会主義の指導理念におけるこうした所有概念の欠如、ここに「現存社会主義」がおちいつてきたところの民主主義や個人の尊厳の欠如といった否定的現象の一つの理論的、あるいは思想的な原因があるのだということ、そうした思いが、マルクスの所有論全体を根底的にとらえ返してみせることへとわたしを突き進ませたもう一つの事情でした。

そうしたスターリン主義的所有概念の再検討は、ソ連、東欧などでも「30年

体制」の再検討とか、集権的社会主義の再検討とか、といった流れの中で、必然的に生じてきてきていたし、それを反映して、わが国においても社会主義経済学者の間でなされてきていました。そして、そこでの一中心問題は、当然のこととして所有というものの経済的実現形態を生産関係の全体系の中で展開しなければならないということ、このことでした。マルクスが長い年月をかけて結実させた『資本論』は、まさしく資本制的私的所有というものの経済的実現形態を生産関係の全体系の中で展開しようとしたものであったのであって、こうした社会主義経済学の分野での所有概念の再検討の方向は、生産＝取得様式をこそマルクスの所有概念の中心をなすものであるというわたしの主張と合流してくるものであったわけでありませう。

## (2) 第二・第三の課題をめぐる事情

第二・第三の課題めぐる事情についていえば、a) 市民社会論的『資本論』解釈は、マルクスが『資本論』第一部という次元において資本制的生産＝取得様式が何からの歴史的転化であるかについて、それを小経営生産＝取得様式からの転化として総括・規定したことを、単純な商品生産者をイメージしての市民的生産様式から資本制的生産様式への歴史的転化として読み、商品論を市民的生産様式論と読むという読み変えの上に、「取得様式転変論」をも本質的にそれとまったく同じこととして「市民的生産様式から資本制的生産・取得様式への転化」論と読み込む「論理＝歴史」解釈を示していたわけですが、わたしは、それは違う、『資本論』から『要綱』へたち帰ってみても、「取得法則転変論」の基本的性格・役割は、資本制的取得・所有というものが〈他人の不払い労働の継続的取得〉ということにはかならないのに、資本制生産の「表皮」を形成する単なる商品・貨幣関係次元＝「単純流通次元」では、譲渡にもとづく取得・等価交換原理が支配しているためにその本質が隠ぺいされていることの暴露、さらにいえば、資本制的生産の「表皮」において有効に通用している「商品生産の所有法則」は、資本制的取得・所有が存立してゆく上での構造的装置であると同時にその存立を支える観念的諸形態の成立基盤となっていること、このことの暴露にあるのだということ、そういう認識を『資本論』と『要綱』とのあいだを往復する中で固めたということです。



b) そこで、このことをマルクスを逆にさかのぼってどういう研究経緯の中から出てきたものであるかを追究すること、これを課題として念頭におきつつ、では小経営生産＝取得様式から資本制的生産＝取得様式への転化というあの「歴史的傾向」総括の意味はどのようなのであるか、を問うこと、つまり、封建制や農奴制・隷農制からの転化としてでなく、また、単純な商品生産からの転化としてでなく、それを小経営生産＝取得様式からの転化として総括・規定したこと、そうした歴史的 성격付け・歴史的 位置づけにこめられているマルクスの資本制的生産＝取得様式に関する歴史認識・歴史理論上の到達点、これを全面的にとらえ返すこと、これがたいへん重要なこととなってきたわけでありませぬ。寡聞にしてこのことについて納得できるような解明に出会ったことはありませんでしたし、また、ちょうど歴史学の分野で小経営生産様式概念および小経営生産様式の歴史的起源と歴史的 位置をめぐって論争が行われていて、それとの関連においてもこのことははっきりさせなければならない問題であると考えたわけでした。

だから、「取得法則転変論」が、「単純流通」次元を絶えず媒介とする資本制的取得・所有の存立構造を問題とする性格のものであるのに対し、あの「第一の否定」「否定の否定」の総括箇所は、そのようにして存立する資本制的取得・所有というものを歴史的に位置づけるものであるという関連にあること、その場合に、「第一の否定」については、今述べたような意味あいにおいての全面的なとらえ返しが必要なこと、だいたい以上のような研究の前半段階で獲得されていた認識と煮詰まった問題意識を研究推進力として、「パリ時代」までさかのぼるということをやってみたわけです。

## 〔Ⅱ〕研究の諸結果

〈研究の諸結果の要点〉に入ってゆきたいと思います。

### (A) マルクスにとっての資本制的所有の中心問題

まず、レジメの1)の部分を読み上げてみます。

《1）【経・哲草稿】段階以降【資本論】に至るマルクスの資本制的私的  
所有解明の根幹を貫く所有のとらえ方・問題の仕方は、それを人間の「生産的生  
活」の特殊歴史的な実現形態ととらえるところにその基礎を置き、人間が自然  
に働きかけて自然から人間に必要なものを意識的に加工・獲得する活動  
（Aneignung）こそが本源的な意味での所有活動であるのとらえ、だから、その  
人間の対自然加工力＝「生産力」の発展に照応して形成され、逆にそれを規定  
し返す人間の社会的関連・社会的関係＝「生産諸関係」の、その都度の歴史的  
あり方、そのもとで営まれる人間の生産＝獲得活動のあり方こそが所有の歴史的  
形態をなすのである、ととらえるところにあった。だから、資本制的所有を  
解明することは、資本制的商品経済社会において、人々の生産＝獲得活動がど  
のように実現されているか、つまり、それが実現されてゆくところの生産諸関  
係がどのようなものであるかを解明することにほかならなかったのである。だ  
からマルクスにあっては、生産＝取得様式こそが所有の中心問題だったのであ  
る。》

ここで資料NO.2を見ていただくことにしたいと思います。

これが研究の諸結果をまとめあげた著作の目次なのでありますが、レジメの  
いま読み上げました部分は、その第二章の〔一〕の（2）の「資本制的私的所  
有の経済学的解明における【哲学の貧困】段階の意義」からとってあるもの  
です。

わたしは、そこでその段階の意義を三つの点において確認しているのですが、  
その意義の第二点目として、「【経哲草稿】における【私的所有】＝資本制的私  
的所有の【概念的把握】によって開示され、【ドイツ・イデオロギー】でより  
具体化されたところの、所有とはなにか、それはどう解明されなければならない  
か、という所有に関する基本的視座が、【ブルジョアの所有】の解明につい  
てのより経済学的に具体化された方法的裏打ちによって鮮明に打ち出されてい  
ること」を強調し、周知の【哲学の貧困】や「アンネンコフへの手紙」でブル  
ードン批判のー核心としてマルクスが示した「ブルジョア的所有に定義を下すこ  
とは、ブルジョア的生産の社会的諸関係のすべてを説明することに他ならない」  
というあの立場・方法こそが「資本論」から振り返ってみて、「まさに、【経哲

草稿」において開示され、「資本論」に向けて経験科学的・経済学的内容を盛り込まれてゆくところの、マルクスの所有論をマルクスの所有論たらしめている基本的な立場・方法であるということ」を確認しているわけです。

資料NO.5は、わたしの著作のいまの確認についての総括的叙述部分です。時間の関係上説明は省略します。

### (B) 資本制的私的所有の存立構造の経済理論の解明について

さて、以上の通り、マルクスにあっては、生産＝取得様式こそが所有の中心問題であって、したがって、資本制的所有を解明するということは、資本制社会において人々の生産＝取得活動がどのように実現されているか、それが実現されてゆく諸関係がどのようなものであるかを解明することにほかならなかったということ、以上の確認の上で、第2・第3の課題の研究結果に移りたいと思います。

すでに、〈研究の道筋〉のところで、「取得法則転変論」の基本的性格・役割は、資本制的取得・所有というものが〈他人の不払い労働の継続的取得〉ということにはかならないのに、資本制生産の「表皮」を形成する単なる商品・貨幣関係次元＝「単純流通次元」では、譲渡にもとづく取得・等価交換原理が支配しているためにその本質が隠ぺいされていることの暴露、さらにいえば、資本制の生産の「表皮」において有効に通用している「商品生産の所有法則」は、資本制的取得・所有が存立してゆく上での構造的装置であると同時にその存立を支える観念的諸形態の成立基盤となっていること、このことの暴露にあるのだということ、だから、それは、「単純流通」次元を絶えず媒介とする資本制的取得・所有の存立構造を問題とする性格のものであること、そういう認識を「資本論」・「要綱」の往復研究の中で固めたということ、を申しあげておきました。

#### (1) 要約

こうした認識の到達点から「経哲草稿」にたち帰った結果をきわめて要約的に示したのがレジメの「2）資本制的私的所有の存立構造の経済理論の解明」の部分であります。レジメを読み上げます。

【『経哲草稿』は、労働の成果がその労働主体に帰属せず、労賃・利潤・地代として彼に対立する資本制的な階級的な私的所有の「概念的把握」を目指し、その存立根拠を「疎外された労働」（「労働(力)商品」の労働）、つまり資本・賃労働関係のもとでなされる特殊歴史的な労働＝生産の在り方に求め、その円環的・再生産連関をとらえる重要な方法的視座を開示したが、しかしそこでは「労働価値説の拒否・否定」という経済学的認識水準と密接に関連して、資本制的な階級的な所有が、商品・貨幣関係次元の私的所有原理＝〈譲渡にもとづく取得〉原理・等価交換原理とどのような有機的連関をなすことによって存立しているのかという問題は、問題意識としても、方法としてもなお未成熟であった。

この問題意識の成熟と両者の有機的連関把握の核心部分への到達は、リカードの労働価値説の受容の基盤の上に『哲学の貧困』において開示され、その連関の経済学的解明の道筋が【賃労働と資本】においてなされたのであるが、【要綱】において、この連関は、資本制生産の「表面」をなす〈単純流通〉次元・局面を絶えず媒介するところの〈貨幣の資本への転化〉問題として整序されるとともに、その論理的再構成が懸命に試みられ、その〈転化〉の繰り返しが〈取得法則の転変〉をもたらすことが開示されたのである。

【資本論】の蓄積論のはじめの〈取得法則転変〉論は、こうした研究営為の発展の極にあって、それは、資本制的な階級的な所有の存立にとって、単なる商品貨幣関係＝単純流通次元・局面がいかに重要な構造的装置となっているかの解明課題を果たすものとなっているのである。マルクスは、そこで資本の生産過程の繰り返し（単純・拡大）を考察することによって、資本制的取得というものゝ他人の不払い労働の継続的取得に他ならないことを明るみに出すのであるが、そこでの解明の重点は、資本の生産過程の繰り返しが、絶えず〈単純流通〉次元での〈労賃〉外観に覆われた〈貨幣の資本への転化〉を媒介するために、その資本制的取得の階級の本質が隠ぺいされること、そして、それが、資本制的私的所有存立の機構的かつ観念上の基幹的装置となっているのであること、このことの理論的総括にあるのであった。】

## (2) 重要なポイント

### a) 「単純な流通」次元の抽象・理論的確定の経緯とその意義

①【経哲草稿】段階の積極的成果についてはいわずにしなければならないことはあるのですが、ここでは省略し、問題展開の必要上、次のことだけ申し上げておきます。

この段階のマルクスは、資本制的所有の階級の本質の把握と、その円環的再生産連関の把握については、『資本論』へ直結する視座を開示したが、その階級的所有が、それ自体は非階級的な単なる商品・貨幣関係次元の私的所有原理＝〈譲渡にもとづく取得〉・等価交換原理とどのような有機的連関をなしているのかという問題については、これを問題にしうる認識構造になかった、ということ。詳細は省かざるをえませんが、この認識構造が「労働価値説の拒否・否定」につながり、いわゆる階級の疎外と商品・貨幣関係の疎外との統一的把握ということができなかつたことにつながっていたのだということです。

端的もうしますと、こういうことです。この段階のマルクスは、労働こそ純生産費でこれが生み出す生産物は労働主体に帰属すべきなのに、これが資本家の手に帰属し、生産物に利潤と地代とが上乗せされて価格がつけられるためにその分だけ高価になるのだという認識、こういう認識をわたしは「労働全収権思想と価格構成論とを無媒介的に結び合わせたような経済学的認識水準」あるいはそのかぎり「ブルードンの水準」と呼んでいるのですが、そういう認識水準にたっていた訳です

生産物に価格をつける次元に不払い労働搾取実現の機構を見るというこの理論構造には、資本制的取得・所有を、等価交換を通じての、等価交換にもとづく階級的取得・所有、つまり、流通表面での等価交換を通じての不払い労働の取得であるととらえる認識は出てきようがなかつた。これが実態だった訳です。「労働価値説の拒否・否定」とか「商品・貨幣関係の疎外と階級関係の疎外との統一的把握の未達成」とかいうことは、このような認識構造と不可分の関係にあったのだということです。

②こうした経済理論上の認識が大きく転換して、労働価値説の基礎の上に、商品・貨幣関係次元の私的所有原理、すなわち〈譲渡にもとづく取得＝等価交換

原理〉を前提に資本制的私的所有を解明しなければならないという認識への到達が示されてくるのが『哲学の貧困』であるわけです。周知の通り、『哲学の貧困』においてマルクスは、プルドンの社会改革論、すなわち等価交換原理を「平等の原理」と考え、その「平等の原理」の貫徹の条件を創り出そうとする社会改革論の「根本的誤謬」が、「労働の価値」つまり「商品としての労働」の「相対価値」とその「商品としての労働」が生み出す価値との混同・同一視の上に、等価交換原理は階級対立や分配の不平等と「両立しない」という認識を導き出してきていること、このことにあることを暴き出し、これに対して、リカードウ価値論の正しい解釈に立脚した上で、「商品に投下される労働量を尺度とする商品交換原理」は、「生産者相互の立場を何等変えないのと同様、『現存する諸階級の敵対性や、直接的生産者（労働者）と生産物の占有者との間の労働生産物の不平等な分配』と『両立する』ものであって、何等それを変えるものではない」という認識を対置しているわけであります。

見られるとおり、マルクスは、ここにおいて、「資本制的な階級的私的所有は、等価交換という商品交換原理と『両立する』ものである」という「認識への到達」をはっきりと示したわけであります。

『賃労働と資本』が、この到達点にたつてその「両立」の積極的展開を原理的レベルで示してみせたこと、つまり、「労働という特殊な商品」が生活資料と価値通りに交換され、その生活資料の消費期間中にその労働が交換で得た生活手段の価値以上の価値を創造するという連関を原理的レベルで示したことは、周知のところだと思います。

③この40年代末到達点の土台上に、50年代前半の研究が積み上げられることによってもたらされた『要綱』『経済学批判』第一分冊刊行の意義は、まさにこの「両立」つまり商品・貨幣関係次元の私的所有原理とその階級的取得・所有との有機的関連の問題を、「経済学批判体系」の出発点における枢軸問題として全面的に解明し、前者の次元・局面を資本制的生産の「表皮」をなす「単純流通」次元・局面として理論的に確定したことにあったということが出来るわけです。

『要綱』が次のようであること、つまり流通で投下されたGが、資本の生産

過程で剰余価値を付加されて $G'$ として再び流通に登場してくる全過程を「貨幣の資本への転化」としてとらえ、その「第二循環の終わり」で「不払い労働による不払い労働の取得」という「資本の本性」が明るみにできることを論じ、そこで「取得法則の転変」を論じていることは、周知のことであろうとおもいます。

④ここで強調しておきたいことは、㉞この「貨幣の資本への転化」の軸心である「資本と労働との交換」が「単純流通に属する過程」と「その労働の消費過程での生きた労働の吸収過程」との「二つの過程」からなることをそこでいくどとなく強調していること、また、㉠「経済学批判原初稿」での「単純流通における取得法則の現れ」の総括的叙述内容、同「第三章・断稿」での「貨幣の資本への転化」の第一局面についてのまとまった整理などは、資本制的私的所有存立の軸心をなす「貨幣の資本への転化」が、日常的に絶えず「単純流通」次元・局面を媒介することの持っている重要な意味を、「取得法則転変」との関連で、次の二つの面で暴露しようとしていたことを認識しておかなければならないということです。

ひとつは、あの『哲学の貧困』で到達し、『賃労働と資本』で原理的な展開を見たところの、労働力の購買が「単純流通」次元・局面でおこなわれ、その消費によって価値増殖が行われるのだというその構造・秘密の暴露であり、もうひとつは、このこと、つまり、現実に進行する「貨幣の資本への転化」が「単純流通」次元・局面を絶えず媒介するということは、「貨幣の資本への転化」自身の謎を、従ってまた「資本の本性」＝資本制的な取得の階級の本質を隠べいし、労働にもとづく所有、分業による個々人の全面的利害依存、自由・平等といった観念形態によってその貨殖の秘密を覆いかくすことになっているだということ、このことの暴露であります。

#### b) 「取得法則転変」論の重要な意義

「取得法則転変論」は、まさに、この二つの面を基本的な内容として内蔵するものになっているのであって、それは、①ひとつには、 $G-W-G'$ の循環が繰り返されれば、たとえ当初の $G$ が自己労働にもとづくものであったと仮定しても、何回かの循環の後には、それは、他人の労働の不払い労働の結晶に転

変することの暴露，だから，資本制的取得というのは，「不払い労働にもとずく不払い労働の取得」なのだということの暴露であります。②しかし他方で，それは，この資本制的取得は，貨幣を資本に転化するに際して絶えず「単純流通」次元・局面を媒介するものであるが故に，すなわち資本制的取得は，「単純流通」次元・局面の諸法則＝譲渡にもとずく取得・等価交換原理——マルクスはそれを「商品生産の本源的諸法則」とか「商品生産の諸法則」とか「商品生産の所有法則」とか呼んでいます——その「適用」「貫徹」によって行われるが故に，「単純流通」次元・局面において形成される観念形態・意識形態によってその本質が隠ぺいされ，「不可解に」されてしまっていることの暴露，を基本的な内容とするものになっているということでもあります。

したがって，そこにいうところの「転変」とは，前者①の意味の「転変」と後者②の意味の「転変」つまり「商品生産の諸法則」が資本制的な階級的取得を単に形式的に媒介するだけの，その階級の本質を塗りつぶし「不可解にする形式」に「転変」しているという意味での「転変」との，二つの意味においてとらえられなければならないことが分かるのであります。

【要綱】の「取得法則転変論」は，この両面を含みつつ，なお未完成・未整理状態であったのが【資本論】で完成される訳ですが，それについては，ここでは残念ながらレジメを見ていただくだけで，詳しくは，私の本の第三章を読んでいただきたいと思えます。

### (C) 資本制的私的所有の歴史理論的解明について

さて，「蓄積論」はじめの「取得法則転変論」が，以上のような意味において資本制的取得・所有が機構的・観念的に障害なく存立するその構造を解明する理論系譜の問題であるのに対し，「蓄積論」終わりの「第一の否定」「第二の否定」総括は，そのようにして存立する資本制的取得・所有を歴史的に位置づける総括規定であるわけで，次にその問題に移りたいと思えます。

#### (1) 要 約

レジメの「研究の諸結果」の3)を読み上げます。

《資本制的な階級的私的所有の存立構造を経済理論的に解明するとともに，



それを共産主義への展望のもとに人類史的に位置づけること—歴史理論的解明—は、『経哲草稿』以来『資本論』にいたるマルクス終生の課題であった。『経哲草稿』は、資本制的私的所有を、「人間的(の)本質」—生産的生活における意識性と共同的・社会的存在性—の自己産出的発展途上の必然的な、「疎外された」実現形態ととらえ、『ド・イデ』は、それを「生産力の一定の発展段階にとっての必然的な交通形態」ととらえかえした。しかし、その「交通形態」=生産関係としての資本制的私的所有の歴史的位置を、個人的分散的な自己労働にもとづく私的所有の没落・否定の極に位置づけたのは『共産党宣言』がはじめてであった。

50年代の研究にもとづいて、マルクスは、『要綱』から『資本論』への過程で、資本制段階を前資本制段階と分かち重要な経済的諸事態——①商品・貨幣関係の部分的支配から全面的支配へ、②労働主体とその労働諸条件との「自然的癒着」「本源的結合」の解体→資本による両者の結合、③搾取の形態転化、④個別家族を基本的単位とする小規模・分散的な生産様式から工場を単位とする大規模生産様式=「事実上の集団的生産様式」への転化——の全面的整理の上に、資本制的生産=取得様式を、従って資本制的私的所有を、小経営生産=取得様式からの歴史的転化として総括するに至るのである。このことの了解の上に、『資本論』第一部が、資本制的生産=取得様式の歴史的位置を農奴制や隷農制からの転化としてでなく、また、単純な商品生産からの転化としてでなく、小経営生産様式=取得様式からの転化として総括・規定したことの核心的意味とらえ返すことが重要なのであって、そうすれば、「第一の否定」が、①小経営生産=取得様式の私的ではあるが非階級的な生産=取得様式(=「個人的所有」)であった側面の否定→階級的生産様式=取得様式(=「階級的所有」)への転化、②生産=取得(所有)の、家族単位の個別分散の形態の否定→資本による階級的生産=取得活動としてではあるが、その生産=取得過程(労働過程)の社会的・集団的形態への転化、を意味するものであることの含意が自ずと了解されることになるのである。「否定の否定」の含意もそこから正確にとらえられることになる。》

## (2) 重要なポイント

前半部分については『共産党宣言』で「第一の否定」「否定の否定」の原型が打ち出されていることの言及だけにとどめ、後段にはいりません。後段の中期の「このことへの了解の上」と言っていることが重要なポイントでありますので、この解説に力点をおいて、最後のまとめに入って行きたいと思います。

### a) 資本制段階を前資本制段階と分かつ四つの事態と前資本制段階の特質

『要綱』とくにその「フォルメン」から「61-63年草稿」『資本論』を整理しなおしてみれば、マルクスが、資本制段階を前資本制段階から分かつ重要な経済的諸事態をレジメに記しておきました4点においてとらえていることがわかります。この四つの事態・指標の歴史理論的位相・性格というものを、わたしは、小経営生産＝取得様式から資本制的生産＝取得様式への転化というあの「第一の否定」総括と重ね合わせてわたしの著作の第四章で確定しているわけですが、ここではまさに結論だけを申し上げて「このことへの了解」に資したいと思います。

①まず、第一の事態、つまり商品・貨幣関係の部分的支配から全面的支配への転化という事態の意味ですが、これは、小経営生産＝取得様式においては、商品・貨幣関係の支配は部分的でしかありえなかったということ、だから、小経営生産様式から資本制生産様式への歴史的転化ということは、単純商品生産様式からの転化ということではまったくないこと、このことを意味しては言うまでもありません。このことの確認の上を経て、この事態に即しての歴史区分認識については、資本制生産からその「表皮」を形成する「単純流通」次元・局面を抽象したその論理次元での、その論理次元に着座した歴史認識という抽象性・表面性を確認することが必要なわけです。

簡単にいえば、「要綱」貨幣章でのあの「依存関係史論」と言われる「人類史の三段階」区分、「資本論」冒頭章第4節での歴史認識がそれであって、要するに資本制段階・前資本制段階の区分を「単純流通」次元に着座して行ったもの、すなわち人間の社会的諸関係から階級的実質を捨象し、また、個人が社会を形成するに当たって独自の単位・位置を占める労働様式＝生産様式の歴史的相違を捨象し、それを社会的分業依存一般・あるいは「相互依存」一般に還

元・抽象することによって、それが商品・貨幣関係という物象的形態をとっているかどうかを基準に歴史を認識するそういう抽象的・表面的次元での歴史認識であるということの確認です。

②さて、以上の確認の上に第2・第3・第4点目の事態相互間の関連及びそれと資本制的生産＝取得様式を小経営生産＝取得様式からの歴史的転化ととらえる歴史認識との関係について『資本論』到達点を整理すれば、マルクスが、資本制段階の特質把握から逆照射してつかみ出した前資本制段階認識は、次のように整理できることをわたしは明らかにしておるわけです。

第一に、前資本制段階では、労働者とその労働の客観的諸条件との「自然的統一」「本源的結合」が解体されきらずに、基本的に維持され続けたということ、

第二に、そして、その「統一」「結合」の基本的単位のあり方が、「アジア的基本形態」（アジアの専制の経済的基礎）では、主として共同体であり共同的取得＝所有であったのに対し、「ギリシア・ローマ的」「ゲルマン的」形態では、家族を基本とする「自由な小土地所有」つまり小経営生産＝取得様式というあり方での「統一」「結合」であったということ、

第三に、この小経営生産＝取得様式とは、④「家族」を自足的な生産的生活の基本単位とするところの（共同体がそれを多かれ少なかれ補足するのであるが）、⑤「土地の占有」を基本条件とし、「自由な土地所有」をその「完全な発展のため」の必要条件とするところの、⑥自然から直接的に、（商品交換ということを経介しないで、農工結合という形で）自らの生活手段を生産＝取得することを基本とするところの、そうした生産＝取得様式であって、その起源はともかくとして、それが、少なくとも「古典古代」以降、資本制的生産＝取得様式にとってかわられるまでつづいたところの基底的な生産＝取得様式であったこと、そして、それは、そのようなあり方において労働者と労働の客観的諸条件との「自然的結合」「本源的結合」を維持しつづけたものであったこと、

第四に、奴隷制・農奴制支配は、こうした小経営生産＝取得様式というあり方での「自然的統一」「本源的結合」を基本的に解体することなく、その「統一」「結合」の内部に労働主体を「生産手段の一部」あるいは道具として強制

的に組み入れたり、その「統一」「結合」を上から丸ごと支配して、それを強制的緊縛下においたりしたものであるから、「自然的統一」「本源的結合」こそが「第一次的」で、奴隷制や農奴制支配こそが「第二次的」だったのだということ、

第五に、搾取形態という点からいえば、小経営生産＝取得様式にあつては、労働者は、土地の占有を不可欠の条件として生活に必要な諸手段を自ら生産＝取得しているのであるから、これを搾取関係に組み入れるには、その占有する土地の外側からの支配＝所有を基礎とする外側からの「経済外的強制」＝人身的支配従属関係が必要とされたのであったこと、つまり、小経営生産＝取得様式というものは、搾取関係＝階級関係をその中に内蔵する生産＝取得様式でないのであって、だからこそ、そこでは、搾取関係は、外側からつけ加えられる以外になかったし、事実それは外側からつけ加えられたものであったのであること、マルクスが、小経営生産＝取得様式の「典型」「完全な発展」は、その支配を除去したところに見いだされるとしたのは、そのことを示したものであったこと、

以上であります。

#### b) 資本制段階の歴史的特質と資本制的所有

①資本制段階から逆照射してとらえ出されたこうした前資本制段階の特質から、資本制段階の特質をとらえ返した場合、その転化の決定的な特徴は、なによりも第一に、「古典古代」以降前資本制段階を貫く基底的生産様式であった小経営生産＝取得様式において、維持され続けてきた労働主体とその労働の実現諸条件との「本源的結合」が完全に解体され、資本が両者を商品・貨幣関係を通じて結合するという様式へ転化したこと、つまり、生産＝取得の主体が労働主体そのものであった事態から、生産を組織し・生産過程を統制し・生産物を取得する主体が非労働者である資本（家）であるという事態へと転化しているこの転化にあること、そのことによって、第2に、搾取関係が、労働者家族の生産＝取得活動に対する外側からの「経済外的強制」＝「第2次形成」から、資本の生産＝取得活動の内部に目に見えない形で「内面化」「内在化」され、いわば「第1次形成」化されたことによって、それが「経済的必然・経済的自

然」と言うべきものに転化していること、以上のことが判明してくるということをも明らかにしているわけです。

まさに、「このことの上で」、わたしは、マルクスが資本制的生産＝取得様式が何からの歴史的転化であるかについて、「資本論」第一部次元で、それを小経営生産＝取得様式からの転化と総括したことの理論上の性格・必然とその核心的内容とが理解されねばならないことを強調しているわけでありませう。

②その理論的性格・必然というのは、こういうことです。

【『資本論』第一部は、資本制的生産＝取得様式とは、なによりも第一に、生産を組織し、生産過程を統制し生産物を直接に取得する主体が資本（家）であり、資本（家）が生産の主体的条件である労働者を労働力商品の購買という形式で、生産の客体的条件である生産手段に結合し、価値増殖目的のもとに統制し、その生産の成果を取得するものであること（この間に見えない形で搾取が内在させられること）、このことを明らかにしたのであった。これをマルクスは、「他人の搾取にもとづく、すなわち賃労働制にもとづく資本制的私的所有」と総括したのであった。

そして、その展開の中に、資本がその組織する労働者の労働を、多人数の労働者の協業と分業にもとづく「社会的労働過程」「事実上の集団的生産様式」として発展させ、それを物質的基礎として資本支配を確立させるものであることを明らかにしたのであった。だから、資本制的私的所有は、「事実上の集団的生産様式にもとづく資本制的私的所有」と再規定されたのであった。

これは、要するに、生産活動をこそ取得活動ととらえるマルクス所有論の根本的視座に立脚して、誰が（主体）、どのように（様式）——生産力的内容も含めて——、それを組織し、展開しているのか、というその根幹の構造を資本制生産に即して明らかにしたものであった、ということが出来るのであって、その根幹の構造を小経営生産＝取得様式に即してみれば、そこでは見てきた通り、生産＝取得の主体は労働者であり、労働主体自身が「自然的統一」「本源的結合」というあり方において、個々の家族単位で、独立して、個別分散的に、自らの労働をその労働の客観的諸条件に結合・接合し、その生産を「自分の計算で」＝自己統制のもとでおこない、その生産の成果＝生産物を直接取得する、

こういうことであった。「独立した個人的労働の必然的帰結であるにすぎない、かの私的所有」とは、こういうことの総括的表現だったのである。

この間の鮮やかな対照・対比、同じくの生産＝取得活動の根幹の構造に照明を当て、つまり、誰が、どのように生産＝取得活動を組織・展開しているか、という直接的な生産＝取得過程のあり方に照明を当て、その次元でとらえられ、つかみ出されたこの鮮やかな対照・対比をなす転化、まさに、「社会の第一次形成」としての労働主体と労働諸条件との結合のあり方つまり生産＝取得過程の組織・展開のされ方という次元においてとらえられたこの転化、これこそが、資本制の生産＝取得様式が何からの歴史的転化なのか、という問題に対して、『資本論』第一部がまさにその第一部「資本の生産過程」次元において、その総括として浮き彫りにしようとしたことだったのである。

『資本論』第一部が「資本制の蓄積の歴史的傾向」総括において、資本制の生産＝取得様式の歴史的な位置・特質を農奴制や隷農制からの転化としてでなく、また、単純な商品生産からの転化としてでもなく、以上のような核心的内容においてとらえられた小経営生産＝取得様式からの転化として総括・規定したことの理論的性格・必然というものは、まさにここにあったといわなければならない。》(著作第四章, PP.209-11) ということでもあります。

### c) 「第一の否定」と「否定の否定」の核心

以上のような根底的なとらえ返しに立てば、「第一の否定」の核心的内容が、レジメの最後に要約してあります通り、①小経営生産＝取得様式の私的ではあるが非階級的な生産＝取得様式(＝「個人的所有」)であった側面の否定→階級的生産＝取得様式(＝「階級的所有」)への転化、②生産＝取得(所有)の家族単位の個別分散の形態の否定→資本の階級的生産＝取得活動としてではあるが、その生産＝取得過程(労働過程)の社会的集団の形態への転化、を意味するものであることの含意が自ずと了解されるし、したがってまた、「否定の否定」つまり「労働者の個人的所有の再建」の意味がこの「第一の否定」の第一の核心的内容の再否定、すなわち資本制の生産＝取得様式によって否定された小経営生産＝取得様式の、私的ではあったが非階級的であったという意味での「労働者の個人的所有」の、その「再建」にはかならないことも自ずと明ら

かになる。そして、その場合、それが「資本制時代の獲得物」である「協業、及び土地を含むあらゆる生産手段の共同占有にもとづく」ということの意味は、小経営生産＝取得様式において、労働者が自分のものとして生産＝取得活動を展開し、その生産物を自分のものとして取得＝所有するためには、労働の客観的諸条件とくに土地の占有が不可欠の条件であったように、資本制的な搾取関係を内蔵した階級的な生産＝取得様式－資本制的所有－の否定によって、労働者自身が自分のものとして生産＝取得活動を展開し、従って、その生産物を自分のものとして取得＝所有するには、労働者による「生産手段の占有」が不可欠の条件であり、しかも、それは、小経営生産＝取得様式の場合のように個別家族単位の、「個別的労働過程」にもとづく、個別分散の占有ではなく、資本制時代の成果に基づく「協業」すなわち「社会的労働過程」「事実上の集団的生産様式」にもとづく労働者の「共同占有」でなければならないこと、このことを意味するものであることもいうまでもないこととなる。

### 〔ま と め〕

以上、わたしは、11年前の報告の着眼点と基本的内容の正しさを全面的に明らかにしておきたいという願望と、それをする事の客観的必要性の痛感とを推進力として、マルクスが資本制的私的所有というものをどのような視座と方法で、どのような内容においてとらえかえたのかを全面的に明らかにする研究に取り組んできた成果のごく要点のみを報告しました。

マルクスにとって、所有の中心問題は生産＝取得様式のことであったこと、マルクスは、その階級的な生産＝取得様式としての資本制的私的所有の存立構造の解明を、それ自体非階級的な単なる商品・貨幣関係つまり「単純流通」という次元・局面との有機的関連の解明として追究したこと、「貨幣の資本への転化」論は、「単純流通」次元・局面を通じての資本制的取得の運動を入り口からみたものであるのに対し、「取得法則転変論」はその運動を出口からみたものであって、両者は表裏の関係において資本制的取得の存立構造を解明する理論系譜に属すること、そして、この円環的に運動しながら存立する資本制的

所有を「資本論」第一部の論理次元で歴史的に位置づけたのが、最後にまとめたような内容の込められた「第一の否定」「否定の否定」総括であったと言うこと、以上の確認をもって報告を終わりたいと思います。これによって11年前の報告の着眼点と基本的内容の正しさを根底から全面的に明らかにしえたと思っておりますが、報告は、ぎりぎりに切り詰めた結論だけでありましたので、詳しくはぜひこの著作に当たってくださるよう最後をお願いをしておきたいと思うわけでありませう。

以 上

### 資料 NO.1

(一) 研究の道筋；

77. 3 《資本の直接的生産過程と「個人（個体）的所有」「再建」問題》  
（高知大学経済学会『海南経済学』第5号）
78. 3 《「個人（個体）的所有」「再建」問題と『経済学批判要綱』（一）》  
（同上誌，第6号）
79. 8 《「個人（個体）的所有」「再建」問題について》  
（経済理論学会年報第16集『現代資本主義と労働者階級』  
青木書店）
- 80.11 《「個人（個体）的所有」「再建」問題と『経済学批判要綱』（二）》  
（高知大学経済学会『高知論叢』10号）
81. 3 《「個人（個体）的所有」「再建」問題と『経済学批判要綱』（三）》  
（同上誌，第11号）
84. 3 《物神性論に関する諸学説》  
（種類・富塚・浜野編『資本論体系 第2巻 商品と貨幣』  
有斐閣，第Ⅲ部・4，所収）
85. 1 《〈否定の否定〉〈個人的所有の再建〉》  
（富塚・服部・本間編『資本論体系 第3巻 剰余価値・  
資本蓄積』有斐閣，第Ⅱ部，C，所収）
86. 2 《『資本論』からみた『経済学・哲学草稿』の意義——「人間的(の)本質」抽出・  
把握と資本制的私的所有の「概念的把握」の意義》  
（福島大学経済学会『商学論集』第54巻第3号）
87. 7 《資本制的私的所有解明におけるマルクスの1840年代到達点——唯物論的社会・  
歴史観からの把握と経済学的解明との両面において——（上）》  
（高知大学経済学会『高知論叢』第29号）



《 〃 (下)》 (同上誌, 第30号)

88. 7 『「単純流通」次元の抽象確定と資本制的私的所有の存立構造の解明 — 資本制的私的所有の経済理論的解明 — (上)』

(同上誌, 第32号)

88.11 《 同 (下)》 (同上誌, 第33号)

89. 5 『経済学と所有 — 「経・哲草稿」から「資本論」 — 』(世界書院)

## 資料 NO.2

西野 勉 『経済学と所有』(世界書院, 1989年5月刊)

— 目 次 —

第一章 マルクスによる資本制的私的所有の経済学的解明と歴史性把握の原点

〔 1 〕 資本制的私的所有の経済学的解明の原点

— 『経・哲草稿』段階の到達点—

- (1) 積極的成果 『資本論』への確実な起点・出発点の設定
- (2) 本質的に未解決であった問題

〔 2 〕 資本制的私的所有の歴史性把握の原点

— 『経・哲草稿』段階から『ドイツ・イデオロギー』段階—

- (1) 『経・哲草稿』段階における資本制的私的所有の歴史性把握
  - 「人間的(の)本質」の抽出・把握とその発展を基軸にすえた共産主義の展望・資本制の所有の歴史性把握—
- (2) 『ドイツ・イデオロギー』における資本制的私的所有の歴史性把握
  - 「私的所有は、生産力の一定の発展段階にとつての必然的な交通形態である」という視座・把握—

第二章 資本制的私的所有の経済学解明における1840年代末到達点

〔 一 〕 資本制的私的所有の経済学解明におけるブルードン批判の意義

— 『哲学の貧困』の段階の到達点—

- (1) マルクス学説発展史上における『哲学の貧困』の意義
- (2) 資本制的私的所有の経済学的解明における『哲学の貧困』段階の意義

〔 二 〕 資本制的私的所有の経済学的解明における『賃労働と資本』と『共産党宣言』

- (1) 『賃労働と資本』— 資本制的階級的の所有と〈譲渡にもとづく取得〉= 等価交換原理との有機的連関の開示— 経済理論的解明の道筋
- (2) 『共産党宣言』— 資本制的私的所有の人類史的位置づけ— 歴史理論的解明の道筋

第三章 「単純流通」次元の抽象確定と資本制的私的所有の存立構造の解明— 資本制的私的所有の経済理論的解明—

〔 一 〕 「単純流通」次元の抽象・理論的確定とその抽象性・現実性の開示— 一八五〇

年代末到達点—

(1) 「単純流通」という現実的局面・現実的結節の抽象・理論的確定

(2) 資本制的経済関係にとっての「単純流通」次元・局面の抽象性

〔二〕「単純流通」次元・局面と資本制的私的所有の存立構造—『資本論』到達点—

(1) 「単純流通」次元・局面と〈貨幣の資本への転化〉

(2) 〈労賃〉形態の外観的欺瞞性を生み出す現実的根拠としての「単純流通」次元・局面の役割

(3) 〈資本の蓄積過程〉が開示する資本制的私的所有の存立構造と「単純流通」次元・局面の諸現象形態の外観的欺瞞性

第四章 小経営生産＝取得様式からの歴史的転化としての資本制的生産＝取得様式の歴史的性質の解明—資本制的私的所有の歴史理論の解明—

〔一〕前資本制段階と資本制段階とをわかつ重要な諸事態と〈小経営生産＝取得様式から資本制的生産＝取得様式への転化〉との関連

(1) 商品・貨幣関係の部分的支配から全面的支配への転化という事態との関連

(2) 労働主体とその労働諸条件との「自然的統一」「本源的結合」の解体という事態との関連

(3) 剰余労働・剰余生産物の取得のされ方・形態の歴史的転化という事態との関連

〔二〕〈小経営生産＝取得様式から資本制的生産＝取得様式への転化〉の核心的内容—『資本論』第一部「資本制的蓄積の歴史的傾向」総括における「第一の否定」の意味—

(1) 労働者を主体とするそれ自体のうちに搾取関係を内蔵しない小経営生産＝取得様式から資本を主体とするそれ自体のうちに搾取関係を内蔵した資本制的生産＝取得様式への転化

(2) 「分散して相互に独立する多数の個人的労働過程」の「一個の結合された社会的労働過程」への転化—個人的な小規模生産様式から「独自に資本制的な生産様式」＝「事実上の集団的生産様式」への転化—

(3) まとめ

第五章 資本制的私的所有の「積極的止揚」の展望—「収奪者たちの収奪」による「労働者の個人的所有の再建」と「社会的所有への姿態変換」

〔一〕「資本制的蓄積の歴史的傾向」総括における「否定の否定」の意味

(1) 資本制的生産＝取得様式の私的階級的性格の「否定」と生産＝取得過程の集団の様式の継承＝「姿態変換」

(2) その基礎となる「資本制時代の獲得物」＝「協業、および土地をふくむあらゆる生産手段の共同占有」について

〔二〕論争の整理

〔三〕『経・哲草稿』を起点としたその到達点

## 資料 NO.3

《さて、この叙述を出発点とし、また帰結点として、わたしは、ここ第四・五章において、マルクスの資本制的私的所有の歴史的位置づけの解明、その『要綱』→『資本論』段階到達点の解明を果たそうとしているのであるが、その場合、細部はさておいて、先ずこの叙述を貫く基本的な歴史認識の問題として確認しておくべきことは、『資本論』第一部は、その全展開をふまえて「資本制的生産様式に照応する取得」のあり方＝資本制的私的所有の歴史的位置・歴史的阶段性を、小経営生産＝取得様式からの転化として総括・規定したということである。

前掲引用文第八パラグラフの「資本制的生産様式に照応する資本制的取得は、独立した個人的労働の必然的帰結にすぎない、かの私的所有の第一の否定をなす」という総括は、そのことを凝縮的に示したものであることは、この引用文全文を読めば明らかであろう。

封建制や農奴制・隷農制などからの転化としてでなく、また、単純な商品生産からの転化としてでなく、小経営生産＝取得様式からの転化として、それとの対比という次元において、資本制的生産＝取得様式の歴史的位置づけがなされていること理由、また、その転化の核心的意味内容については、のちに明らかにすることにして、ここでは、そのことの考究を課題意識として前提した上で、資本制的生産様式と同じこととしての資本制的取得様式＝資本制的私的所有が、何らかの歴史転化かという問題について、マルクスが『資本論』第一部の展開をふまえて、その次元で、小経営生産＝取得様式からの転化であると総括・規定したこと、このことを両章展開の出発点として確認しておくことにしたい。\*

※ここでわたしが、資本制的生産様式と同じこととしての資本制的取得様式＝資本制的私的所有としていることについて、誤解を残さないよう、念のため簡単な説明を加えておく。

第一に、フランス語版での「資本制的生産様式に照応する資本制的取得」と訳されている「照応する」は、“conforme”であって、それは「同形の」「合致する」「合同の」という意味であって、〈同じことである〉ことを意味するものだけということである。

第二に、ドイツ語版第二版では、「資本制的生産および(=und)取得様式、したがって資本制的私的所有は」(Ka II, S, 683.)となっているのであって、ここで“und”は“oder”と同じ意味「すなわち」と解するのが妥当であることである。

この両者を素直に読めば、資本制的生産様式と同じこととしての資本制的取得様式＝資本制的私的所有、となることは、これ以上の説明の不要なことであろう。

もともと、本書第一・二章で確認したように、マルクスは、生産活動＝取得活動ととらえ、その歴史的あり方を所有形態ととらえる視座を基本的視座としているのであるから、こうしたことはある意味では説明不要なのであるが念のためである。》

西野『経済学と所有』pp.154～5.

## 資料NO.4

『経済学批判要綱』の「ノートⅣ」〈フォルメン〉直前に〔 〕でくくっておかれて  
いる叙述；MEGA, II/1.2, SS.377~8. より訳出

「資本と労働とが入り込んでゆく諸関係を、所有関係または所有法則として表すためには、価値増殖過程における両側のあり方（das Verhalten）を取得過程として表しさえすればよい。たとえば、剰余労働が資本の剰余価値として措定されるということは、すなわち、労働者自身が彼自身の労働の生産物を取得しないと言うこと、つまり、生産物が、彼にとっては他人の所有（fremdes Eigentum）として現れるということである。逆に言えば、他人の労働が資本の所有として現れるということである。

ブルジョア的所有の第二法則、そこに第一法則が転化している——そして、それ（第一法則—筆者）は、相続権など通じて、個々の資本家の常ならぬ出来事の遭遇から独立した存在を続けている——のだが、この第二の法則は、第一の法則と全く同じように法則として打ち立てられる。第一の法則は、労働と所有との同一性であり、第二の法則は、否定された所有としての労働、または、他人の労働の他人性の否定としての所有である。

事実、資本の生産過程において、より進んだ説明の際に同じことがもっといっそう明らかにされるように、労働は、一つの総体性——諸労働の結合体——であり、その総体性としての全体労働は、個々バラバラの労働者の作業ではなく、種々の労働者たちの作業が協力しあっているのであるが、それは、彼らが結合されている限りにおいてそうなのであって、彼らは相互に結合者としては関係しあっていないということ、そういうことのために、その総体性の個々の構成部分は、その総体性から疎遠なのである。彼らの結合体においても同じように、この労働は、一つの他人の意志および一つの他人の知能に隷属し、それに指揮されるのである——その労働の精神的統一を自分の外部に持っているのであるが、それは、ちょうどその労働が物質的統一において、機械、すなわち固定資本の対照的統一のものにあるのと同じである。固定資本は、魂を与えられた怪物として科学的思想を客体化し、事実上その総括体であり、決して個々の労働者には用具として関係せず、むしろ反対に、個々の労働者が魂を与えられた精密体、生きた孤立したその付属物として存在しているのである。

だからその結合労働は、二つの側面から即時的な結合である；それは、協働する諸個人相互の関連としての結合でもなく、彼らの特殊なまたは個別的機能に関してであれ、労働の用具に関してであれ、それらへの彼らの干渉行為としての結合でもない。したがって、労働者が、彼の労働の生産物に対して他人のものとして関係する場合は、その結合労働に対する彼の関係行為も、同じ程度に他人のものとしてのそれであって、それは、アダム・スミスなどによって、煩勞とか犠牲などとして把握されたところの、たしかに彼のものでありながら、しかも、彼にとって疎遠な、強制された生命発現としての、彼自身の労働に対する関係のようなものである。

労働それ自体は、その生産物と同じように、特殊な個々の労働者の労働としては否定されている。否定された個別的労働は、今や、實際上、措定された結合労働である。だが、そのように措定された共同労働または結合労働——活動としても、物体として静止的形態へ移行したものとしても——は、同時に、直接的には、現実に存在する個々の労働には他者として——他人の主体性（資本の主体性）としてと同じく他人の客体性（他人の所有）として——措定される。したがって、資本は、労働をも、労働の生産物をも、個々の労働者の否定された個別的労働、否定された個別的所有として代表する。」

[Um die Verhältnisse, worin Capital und Lohnarbeit Treten, als *Eigenthumsverhältnisse* oder Gesetze auszudrücken, haben wir nichts zu thun als das Verhalten beider Seiten in dem *Verwerthungsprocess als Aneignungsprocess* auszudrücken. Z. B. daß die Surplusarbeit als Surpluswerth des Capitals gesetzt wird, heißt der Arbeiter sich nicht das Product seiner eignen Arbeit aneignet; daß es ihm als *fremdes Eigenthum* erscheint; umgekehrt, daß die *fremde Arbeit* als Eigenthum des Capitals erscheint. Dieses zweite Gesetz des bürgerlichen Eigenthums, worein das erste umschlägt — und das durch Erbrecht etc eine vom Zufall der Vergänglichkeit der einzelnen Capitalisten unabhängige Existenz erhält — wird ebensowohl als Gesetz aufgestellt wie das erste. Das erste ist die Identität der Arbeit mit dem Eigenthum; das zweite die Arbeit als negirtes Eigenthum oder das eigenthum als Negation der Fremdheit der fremden Arbeit. In fact, in dem Productionsprocess des Capitals, wie sich noch mehr bei weitrer Entwicklung desselben zeigen wird ist die Arbeit eine Totalität — eine Combination von Arbeiten — wovon die eizelnen Bestandtheile sich fremd sind, so daß die Gesamtarbeit als Totalität nicht das Werk des einzelnen Arbeiters und auch das Werk der verschiedenen Arbeiter zusammen nur ist, soweit sie combinirt sind, nicht sich als Combinirende zu einander verhalten. In ihrer Combination erscheint diese Arbeit ebenso sehr einem fremden Willen und einer fremden Intelligenz dienend, und von ihr geleitet — ihre *seelenhafte Einheit* ausser sich habend, wie in ihrer materiellen untergeordnet unter die *Gegenständliche Einheit* der *Maschinerie*, des capital fixe, das als *beseeltes Ungeheuer* den wissenschaftlichen Gedanken objektivirt und iaktisch das Zusammenfassende ist, keineswegs als Instrument zum einzelnen Arbeiter sich verhält, vielmehr er als beseelte einzelne Punktualität, lebendiges isolirtes Zubehör an ihm existirt. Die combinirte Arbeit ist so nach doppelter Seite hin an sich Combination; nicht Combination als Beziehung der zusammenarbeitenden Individuen auf eomander, noch als ihr Uebergreifen

sei es über ihre besondere oder vereinzelte Funktion, sei es über das Instrument der Arbeit. Wenn der Arbeiter sich daher zu dem Product seiner Arbeit als einem fremden verhält, so ist ebensowohl sein Verhalten zu der combinirten als einer fremden, wie zu seiner eignen Arbeit als einer zwar ihm amgehörigen, aber ihm fremden, erzwungenen Lebensäußerung, die als *Beschwerde, Opfer* etc daher von A. Smith etc gefaßt wird. Die Arbeit selbst, wie ihr Product, ist *negirt als die des besondern, vereinzelten Arbeiters*. Die Arbeiters. Die negirte vereinzelte Arbeit ist nun in der That die ponirte gemeinschaftliche oder combinirte Arbeit. Die so gesetzte *gemeinschaftliche oder combinirte Arbeit* — sowohl als Thätigkeit, wie in die ruhende form des Objekts übergegangene — ist aber zugleich unmittelbar als ein Andres der wirklich existirenden einzelnen Arbeit gesetzt — als *fremde Objectivität* sowohl (fremdes Eigenthum), *wie fremde Subjectivität* (die des Capitals). Das Capital repräsentirt also sowohl die Arbeit wie ihr Product als negirte vereinzelte Arbeit und daher Eigenthum des vereinzelten Arbeiters. Es ist daher die Existenz der gesellschaftlichen Arbeit — ihre Combination als Subject wie als Object — aber diese Existenz als selbst selbstständig ihren wirklichen Momenten gegenüber existirend — also selbst als *besondere* Existenz daneben. Das Capital seinerseits erscheint daher als das übergreifende Subject und Eigenthümer *fremder Arbeit* und sein Verhältniß selbst ist das eines ebenso vollkommenen Widerspruches wie das der Lohnarbeit. ]

## 資料 NO.5

『経・哲草稿』は、「私的所有」(＝資本制的私的所有)を、対象的物財に対する人間の関係ではなく、<人間の生命活動>の特殊歴史的なあり方＝実現形態ととらえる視座、つまり、「私的所有」(＝資本制的私的所有)とは、<人間の生命活動>すなわちその意識性と共同的・社会的存在性とを「人間的(の)本質」とする「生産的生活」の特殊歴史的な実現形態(＝「疎外された」実現形態)ととらえる視座を開示した。

『ドイツ・イデオロギー』は、それをより経験科学的なものに、すなわち、歴史貫通的な対自然への人間の意識的かわりの発展——その次元での協働の発展を含めて——を「生産力」と括り、それに照応して形成される対人間相互間の社会的関連・社会的関係(＝共同的・社会的存在性)の特殊歴史的形態を「交通形態」ととらえかえすことによって、先の『経・哲草稿』が開示した、「私的所有」とは、人間の「生産的生活」の特殊歴史的な実現形態であるとしてとらえた視座を、「私的所有は、生産力の一一定の発展段階にわたる必然的交通形態」であるという視座により具体化・発展させ

たのであった。それは、第一章においてみた通りである。

今、引用したところの、『哲学の貧困』・「アンネンコフへの手紙」で示されている、「ブルジョア的所有」とは、「ブルジョアの生産の社会的諸関係」あるいはその「社会的諸関連」のことである、あるいは、それが形成するものに他ならない、ととらえる立場・方法は、まさに、こうした『経・哲草稿』→『ドイツ・イデオロギー』の視座そのもの、その直接的延長にあるものであることは、「交通形態」という用語が「生産の社会的諸関係」とか「生産諸関係」あるいは「生産の社会的関連」という用語にとってかわられているということの了解に立てば、容易に理解されることであろう。

まさにマルクスの所有論、つまり「私的所有」・「ブルジョア的所有」＝資本制的私的所有のとらえ方の独自性は、それを人間の「生産的生活」の特殊歴史的な実現形態ととらえるところにその基盤をおき、人間が自然に働きかけて自然から人間に必要なものを意識的に加工、獲得する活動（Aneignung）こそが本源的な意味での所有活動であるととらえ、だから、その人間の対自然加工力・獲得力＝「生産力」の発展に照応して形成され、逆にそれを規定しかえす人間の社会的関連・社会的関係＝「生産諸関係」の、そのつどの歴史的あり方、そのもとで営まれる人間の生産＝獲得活動のあり方こそが所有の歴史的形態をなすのであるととらえるところにあった。だから、「私的所有」・「ブルジョア的所有」を解明・説明することは、「ブルジョア社会」＝資本制的商品経済社会において、人々の生産＝獲得活動がどのように実現されているか、つまり、それが実現されてゆくところの生産諸関係がどのようなものであるかを解明・説明することに他ならない、という総括的規定がマルクスにとっては、既得の・自明のこととして語られてくるのであった。》

西野『経済学と所有』pp.75～6.